

牛の悪性顆粒膜細胞腫

鹿児島大学農学部家畜病理学教室出題 第17回獣医病理学研修会標本No.270



動物：黒毛和牛，雌，5才。

臨床的事項：鹿児島県指宿市で飼育されていた牛で3産し、優良系統生産牛として評価された牛である。昭和51年10月末に全く前駆症状なく食欲が減退し、つづいて廃絶したので診療を受けた。栄養状態は良好であるが、血液検査では赤血球数554万、白血球数4,000、Ht. 28%、等貧血像を示し、尿pH. 8.7、胃液pH. 8.4等のアルカリ化の異常が認められた。直腸検査で、左子宮角の延長部と思われるところに広間膜と癒着した小児頭大の硬固な腫瘤と、さらに前下方に大人頭大の硬固な腫瘤を触知した。11月4日腫瘤摘出のために開腹手術を行ったが翌日斃死した。

肉眼所見：腫瘤は左側卵巢と思われる部位に広間膜と癒着した小児頭大、大網膜に癒着した大人頭大の2個よりなり、共に暗赤色を呈し、弾力性に富み、少々柔軟で結合織性被膜で覆われ、表面線維索の付着がみられた。剖面は血液に富み、あたかも血腫状を呈するが詳しく観察すれば灰白色部が樹枝状の分岐をしている。なお、右側卵巢は認められたが、左側卵巢は該当部に認められな

かった。他の臓器には特に異常は認められなかった。

組織学的所見：クロマチンの少々乏しい円形、楕円形、紡錘形の細胞が不規則に増殖し、腫瘍性的変化を示し、核分割像も随所にみられ、細胞間の出血が顕著であり所々に壊死部も散見される。この部の鍍銀染色では腫瘍細胞を囲んで網状に格子線維の発達がみられる。腫瘍細胞中にロゼット状を呈する腺腔もかろうじて認められ（写真A）、また胞腔が散在し、胞腔はエオジン淡染物質、脱落細胞、一部赤血球を含有するものもあり濾胞を思わせる（写真B）。腫瘍細胞の増殖と共に血管形成と出血が顕著であるのも本例の特徴である。腫瘍細胞のPAS反応は陰性、Sudan染色も明瞭な脂質の存在を示さない、間質は結合織が樹枝状に発達し、一部に黄色顆粒が散在している。

以上の組織所見から卵巢由来の腫瘍であることは明瞭で、卵巢の顆粒膜細胞を母組織とする悪性腫瘍、すなわち悪性顆粒膜細胞腫と診断されよう。本例の如き急性経過をとった巨大な卵巢腫瘍は珍しい。